

中野裕之

なかの・ひろゆき

映画監督

経歴

生:昭和33年(1958年)、福山市松浜町生まれ

昭和51年(1976年)	18歳	広島県立福山誠之館高等学校卒業
昭和55年(1980年)	22歳	早稲田大学商学部卒業
昭和55年(1980年)	22歳	読売テレビ放送に入社
昭和60年(1985年)	27歳	タイレルコーポレーション設立
平成5年(1993年)	35歳	ピースデリック・スタジオ設立
平成10年(1998年)	40歳	映画「SF・サムライ・フィクション」で、第2回プテヨン国際ファンタスティック映画祭グランプリを受賞
平成10年(1998年)	40歳	ショートフィルム作品「アイロン」で、第59回カンヌ映画祭批評家週間部門ヤング批評家賞を受賞
平成18年(2006年)	48歳	カンヌ国際映画祭批評家部門ヤング批評家賞
平成21年(2009年)秋	51歳	映画「TAJYOMARU」を公開
平成22年(2010年)7月	52歳	ブルーレイ映画「美しい惑星」(監督30周年記念)を発売

生い立ちと学業、業績

福山誠之館高、早稲田大商学部卒業。

見る人を気持ち良くする「ピースな映像」をモットーにする映画監督で、新感覚の時代劇「SFサムライ・フィクション」「RED SHADOW 赤影」などを制作。

特に短編映画「アイロン」は、白いものを見るとアイロンをかけたがる男の不器用な生きざまと心の葛藤を描写。

2006年(平成18年)にカンヌ国際映画祭批評家部門ヤング批評家賞を受賞した。

Mr.Children、今井美樹、GLAYらトップアーティストの音楽ビデオやコマーシャルフィルム約200本を手掛けた当代一の映像作家でもある。(出典1)

「未来と映画」

中野裕之（昭和51年卒）

私は映像を作る作家です。

誠之館に在籍中の青春時代は、エレキギターを片手に音楽ざんまいの日々を送りました。それゆえに学業の成績は最低でしたが、なんとか希望の大学に入ることができました。

何故かという、現在の職業にも関係しているのですが、目を使う記憶術がうまくいったからです。

これは壁や天井に歴史の年表や英語の単語をズラリと貼っておいて、それをボーと景色の一部として眺めておくというものでした。

受験の時には、確かあれは窓の上にあったなという風に、景色の記憶を探っていけば答えが見つかるというものです。

思い出などは言葉や映像の断片、そしてにおいや温度なども含めて蘇ってきますよね。

今の僕はそういう感覚を自分で創作、映像化して皆さんに楽しんでもらうことをやっているわけです。

映画は準備に十年かかって去年やっと撮りました。

今から三百年前を舞台にしたサムライの映画です。

城下町である福山で育った私は、いつかサムライの映画を撮りたかったのです。

しかし実際に撮れるまでの数年は精神的にも苦勞の連続、そして撮影に入ってから大変でした。

頭で思い描いたシーンをシナリオで言葉にして、他人に自分のイメージを伝えると役者はそれを自分なりに表現する方法を考え、スタッフは長い経験の中からこういうものはこうするのがいいとされてきたとこだわります。

しかしそれは私の求めるものではなかったのです。

新しい表現をしようとする私とスタッフの間で何度もぶつかりあいがありました。

とかく人間は固定観念という枠にはまりたがります。

それはその方が慣れ親しんでいるから安心だったりするのでしょう。

しかしそんな概念といっても例えば17世紀の頃にコペルニクスが唱えた地動説の裁判が去年やっと終わり、ローマの教会が地球が回っているのは正しいと認めたように、時間がかかっても覆されるものです。

子供などは昔の人とは違う文化に育っていて、枠にはめようとする大人さえいなければ全くの自由です。

未来は、これはこうでなくてはならないとか、今までがこうだったからといった固定観念を捨てて、本当に未来に必要なことを選択することで明るくなるのだと思います。

現代は新世紀を目の前にしてそんな選択を迫られている時代です。

映画でそのようなメッセージを表現しようとして頑張ってシナリオを書きましたが、映画を制作する側はただ映画が好きの人ばかりで、現実的に未来や環境問題のことを考えている人は少なく企画は通りませんでした。

そこで、昔の黒沢明監督の作品のようなヒューマニズムを通して物語を作るのはどうかと思い、山本周五郎さんの時代物小説を読みまわりました。

そこには昔の日本人が持ち合わせている仏教観や倫理観がたくみに物語の中に描かれていました。

そこで、2年かかって脚本家と一緒に山本さんの原作からシナリオを作ったのですが、これまた初めて監督をする私に対する信用がないために企画は流れてしまいました。

それでもめげずに、それならば娯楽に徹して作ってみようと思い、すぐに次のシナリオに取り組んだのです。

そしてやっと企画が通ったというわけです。

出来上がった映画は昔のチャンバラ映画のように楽しい娯楽作品ですが、命を大切にすることをテーマにしています。

自殺者が交通事故死亡者よりも多いという現実は残念なことです。

人は必ず死ぬのだから、精一杯頑張って人生をまっとうしてほしいものです。

音楽の映像を多く撮ることで音楽家と出会い、明るい未来にするためのいろんな方法を語り合い、それが音楽の詩になり唄となって、全国の皆さんに届いていきます。老人の方が、船に乗って大変な旅をして小笠原島に行かなくともイルカが見れるように、ビデオをいう便利なものが発明されました。映像作家としてはそういうことも考えて自然の映像も作ってきました。

しかし映画は世界中で観てもらえます。

そこで、世界の環境を荒らしている日本企業の行動やたよりない政府の環境に対する姿勢などから日本に対してよくない印象があることを知っている私としては、日本人のいいところである謙虚な姿勢や考え方を世界に示したく、サムライ映画を作ることにしたのです。

今は高校生の流行がすべてのような変な文化の日本ですが、何かが流行すると国民全体がそれに乗るという事は、明るい未来のための行動が、ブームになれば日本はすぐに明るい未来に近づくことができるということです。

ピースを流行らせましょう。 (出典2)

出典1:『知っとる? ふくやま 検定試験/公式テキスト』、134頁、「当代一の映像作家 中野裕之」、中国新聞社編刊、2007年11月15日

出典2:『誠之館同窓会会報(第5号)』、16頁、「特別寄稿 未来と映画」、中野裕之、福山誠之館同窓会編刊、1998年5月1日

2007年11月29日追加●2010年9月30日更新:経歴・本文●